

『経営学論集』創刊100号を迎えて

専修大学経営学部長 馬場杉夫

『専修大学経営学論集』が、昭和40年11月に創刊されて以来、創刊100号を迎えることとなった。これまでの先人の方々のご尽力とご努力の賜物であり、関係各位に御礼申し上げるとともに、この記念すべき時に立ち会えたことを大変光栄なことと思う。

『専修経営学論集』創刊の経緯は、初代経営学部長である梅井義雄 [1965]「創刊のことば」によると、ざっと次のとおりである。専修大学が発行する研究機関誌として『専修経営学論集』が刊行される以前は、専修大学学会が、昭和5年4月から昭和17年まで『経済法律論叢』を発行していた。戦後、その後をついで『専修大学論集』が昭和27年1月から昭和39年12月まで刊行された。『専修大学論集』は、経済、商業、経営、法律だけではなく、人文科学から自然科学まで包摂する総合学術雑誌といった特徴を持ったものであった。しかしながら学問研究が専門化すると同時に、昭和40年4月に経済学、商学、経営学、法学の4学部構想が確立したのを機に、これら4つの学問的専門領域へそれぞれ発展させ、『専修大学論集』は解消した。同時に、人文、自然科学等の一般教育関係の学術雑誌として、従来の名称を継承しながら、新たに『専修大学論集』の1号を発行した。

『専修大学論集』は当時、年3回、発行していたが、『専修経営学論集』は年2回の発行を目指した。2015年でちょうど50年で100号を発行することができたことは、我々の誇りである。

また、これまで、29回の特別号が出されている。この内、退職記念号は22回、追悼号は4回である。このほかに創刊間もない頃は、古希記念号が1回、情報管理特集号が2回出されている。そして、今回が創刊100号記念号となる。

100号までに掲載された内容は学術論文として文献研究から実証研究、さらには新たな研究にむけたトライアル、加えて、研究ノート、書評、学部の記録、博士学位論文の要旨など、実に多岐にわたる。経営学部の所属教員を中心とした知の発信が、複合的かつ多方面へ大きな影響を与えたことであろう。

一方、近年、学内発行の論文の役割が変わりつつある。その主たる要因として、若手教員を評価する際に、査読論文が求められる場面が増えてきたこと、また、海外への情報発信が社会から求められていることが考えられる。ここに改めて、学内発行の論文の意義を再確認する必要性もあろう。

専大経営学部が存続することと『専修経営学論集』が継続的に発行されていくことは、ほぼ同義であるとも考えられる。今後も絶えることなく発行されていくことを切に願っている。今後も本学内外の研究者と関係者のご支援を賜れば幸甚である。